OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トーマス・マンと第一次大戦 : 「文化」と「政治」についての一考察
Author(s)	村田, 美紀
Citation	独文学報. 2002, 18, p. 47-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トーマス・マンと第一次大戦

――「文化」と「政治」についての一考察――

村　田　美　紀

1

第一次大戦中に一貫してドイツの戦争を弁護し続けたトーマス・マン（Thomas Mann）は、他の知識人たちと同様に彼自身も戦時中の論争の骨格とする「文明」と「文化」という対立命題を、決して開戦後にはじめて用いたのではない。開戦からまだ間もない1914年11月に『ノイエ・ルントシャウ』*Neue Rundschau*に掲載された問題の戦時論文の一つ『戦時随想』*Gedanken im Kriege*冒頭の一文は、その5年前にすでに、未完の文学随想『精神と芸術』*Geist und Kunst*（1908-1912）[1] のために書き溜めた準備ノートのなかに存在していたものであり、「118」という番号が付されたその書き込みは、1909年12月25日付の『ターク』*Tag*への投稿にも用いられていた。

> 文化は明らかに野蛮の対極ではない。それはむしろ、様式を持った野生状態にほかならぬこともしばしばある。[……] 文化はまとまりであり、様式であり、形式であり、姿勢であり、嗜好である。そのすべてがいかに珍奇で、滑稽で、粗野で、血なまぐさく、恐ろしくとも、とにかく文化は世界のある種の精神的な組織化である。文化は神託を、魔術を、少年愛を、妖怪を、人身御供を、狂気じみた礼拝形式を、舞踏病を、異端審問を、異端者の処刑を、魔女裁判を、毒殺の横行を、多種多様な残虐行為を包含し得るものである。ところが、文明は理性、啓蒙、馴致、教化、懐疑、分解である。――精神である。芸術がどちらに属するのか、文化の問題なのか、それとも文明の問題なのか、それについては何ら疑いの余地はない [……]。[2]

また、同じく『戦時随想』の終わり近くにある「ドイツ性（deutsches Wesen）が悩ましいほどに問題であること、誰がそれを否定するだろうか！」で始まる一文も、部分的にはこの『精神と芸術』からの再録であることがわかる。[3]

完成どころか執筆開始にすらこぎつけなかったこの『精神と芸術』は、作品としては日の目を見ることはなかったものの、その後のマンの芸術、文化、政治の問題についての長短まじえた数多くの論文で断片的に利用されており、そのことから察せられるように、いろいろと問題をはらんだものとなっている。その創作ノートを一瞥すれば、覚え書きが集中的に行われる1910年前後に、マンの問題意識が、大戦前夜の精神的状況を反映させつつ拡大されていく様子が跡付けられる。それは、自己批評が自分を取り巻く世界の批評、すなわち時代批評と絡み合うなかで、作家の危機意識がドイツの危機意識と重なり合っていく過程であった。こうして戦前に作家の意識にのぼった様々な問題が開戦を機に噴き出したのである。

『精神と芸術』の本来の意図は、「文明」と「文化」について語ることでもなければ、「ドイツ性」の問題に言及することでもなかった。目的はあくまで、大作の企画が立て続けに失敗し、作家でありながら書けないという危機的状況のなかで、「認識の芸術家」としての自らの立場を明確にするために、「生」の批評としての「精神」と「生」の模倣としての「芸術」とを区画するところにあった。ところがマンは、「精神」に軸足を置いて「批評性」と「感覚性」とを対置する葛藤型の芸術観を、芸術家像を「生」を認識する者から「生」を認識しかつ美的に享受する者へと展開することによって、両者を包括する融和型の芸術観へと改め、この「厳粛であると同時に軽快な」芸術を「新たな古典性」（GW X 842）「綜合」「第三の国」（GW XI 564）と呼んで、暫定的な危機回避をはかるに至った。むろんこれは「精神」の立場を完全に放棄するものではないが、それでも、「生」に対する態度決定と密接に関わっているこの「精神」と「芸術」を巡る見解において、マンのなかでこれまで圧倒的優位を占めていた「精神」に代わって「芸術」が重みを増してくることの持つ意味は大きい。というのも、マンの「精神」と「芸術」の問題は一方で、時代が呈する「生」の礼讃モードや「文芸におけるショーヴィニズム的流行」[4] についての批評をまじえつつ、この当時、知識人や青年の間で盛んに見受けられた、啓蒙

理性や近代文明に対して人間本性や文化を称揚する傾向のなかで焦点となった、「文明」と「文化」の問題とも絡んでおり、その見解の変化は単なる芸術観の問題にとどまらないからである。「文明」と「文化」について、また「ドイツ性」について言及するにあたって批評家に求められる中立を守っていたとはいえ、この文学随想の始まりにあった「芸術・芸術家とは？」という問いが「ドイツとは？」という問いに向かって押し拡げられていったこと、芸術観の問題と文化の問題とドイツ性の問題とが一つの創作ノートに混在していたことは、マンにおけるそれぞれの問題の内的関連を推測させるものであったと言える。

第一次大戦勃発後、『精神と芸術』のノートから『戦時随想』へと再録された「文明」と「文化」の対比が「西欧」と「ドイツ」の名のもとに行われ、つまり、分析・批評の「精神」が合理的なものとして「文明」とともに「西欧」へ、「生」に密着した「芸術」が非合理的で有機的なものとして「文化」とともに「ドイツ」へと収斂されていくなかで、マンが後者の立場を主張したとき、その「芸術」は「文化」とともに「ナショナルなもの」の表象性を帯びていた。芸術家・作家や大学教授らいわゆる教養市民と彼らが拠り所としていた「文化」がこの当時占めていた位置を考えれば、第一次大戦前夜に「芸術の問題」と「ドイツの問題」とを絡ませながら、やがて「文化」を通じて「ナショナルなもの」を志向するようになり、そして大戦に臨んで「ペンをもって」ドイツを弁護した点で、マンの言説もまた、この時代の作家の精神的状況を映すものであったと言えよう。

永年にわたって統一国家としての実体を持たず単なる文化的概念であり続けた「ドイツ」が、1871年の帝国創設をもって政治的現実と化して以来、非政治性・反政治性の領域で文化面の担い手を自負していた教養市民は、急速に進められる工業化・都市化のなかで、その社会的地位を大きく揺るがされた。彼らは、近代化に伴う自然科学の発達や学問の細分化によって、ドイツ社会は実利・支配を目的とする偏狭で厳格な専門主義・物質主義・俗物主義に堕し、教養の理念が崩壊しつつあるという危機感の高まりから、近代化の代償として失われつつあるものを取り戻そうとして、ますます反政治的に「文化」を称揚する傾向を強めていった。ところが、政治や国家に対して区画されたこの「文化」は、第一次大戦勃発を機に、まさにこの政治・国家と結託する。つまり、戦争を、急速な近代化による物質的な外

的生活の発展の陰で強いられた精神的な内的生活の圧迫からの解放として、社会の周縁に追いやられているという世紀転換期以来の閉塞状態からの突破口として捉えたとき、反戦を唱えた一部の例外を除いて、大半の知識人は、外的刺激を梃子にして「文化」の刷新・活性化をはかるかのように、文明批判の矛先を第二帝政国家から西欧へと向け、「文化」による民族の再統合を標語として掲げつつ「ドイツ」の立場を主張したのである。[5]

「文化民族」(Kulturvolk)[6] としてこの戦争を最後まで闘いぬくのだという呼びかけが、ドイツ各地から集まった歴史・哲学・法学・社会学など各分野の学者や作家ら93名の知識人の共同署名によってなされたことが、それを端的に物語っている。

> 我々のいわゆる軍国主義に対して行われている闘いは我々の文化に対する闘いではない、と敵方は空々しくも言ってのけているが、それは真実ではない。ドイツの軍国主義がなければ、ドイツの文化はとっくに地上から抹消されていたことであろう。ドイツの軍国主義はドイツの文化を守るべくしてこの文化から生まれ出て、いま、何百年もの間、他に類を見ないほどに数々の侵略に襲われ続けてきた土地にいるのである。ドイツの軍隊とドイツの民族とは一つである。この意識が今日、7千万のドイツ人を、教養・階級・党派の別なく結び付けている。[7]

こうして戦争という例外状況において国家の問題に直面した「文化」の担い手たる知識人たちが、特定の政治システムを伴う国家としてのドイツが実際にヨーロッパ諸国を相手に行っているこの戦争を、権力維持や領土拡張の問題としてばかりでなく、精神的伝統や世界観の闘争として受け止めて、政治的秩序の弁護と文化的価値の主張とを対外的に並行させたとき、ドイツの「文化」と「政治」との乖離は「ナショナルなもの」によって止揚された。

第一次大戦勃発を「あらゆる安定したものの動揺」や「思想の混乱によるあらゆる文化的基盤の震撼」を引き起こした大事件と呼んだ（GW XII 12）マンは、まさにそうした時代のなかで、数々の論文を通して政治的な問題に言及し、反民主主義の立場からドイツの戦争を弁護したのである。彼は、戦時中に自らが執筆した他の時事論文とは比較にならないほど時間

的・精神的に多くを費やして、はじめて徹底的に「ドイツ問題」に取り組み、分量的にも文字通り大論文となった『非政治的人間の考察』*Betrachtungen eines Unpolitischen*（1918）のなかで、自らの戦争に対する関わりについて次のように述べている。

> 自分でよくわかっていることだが、この戦争に対する関係においても私は一人の市民（Bürger）である。市民はその本質からしてナショナル（national）である。市民がドイツの統一思想の担い手であったのは、常にドイツの文化と精神性の担い手だったからである。ところで、しばしば戦争一般の目的論的機能は、戦争がナショナルな特性を確証し、維持し、強化する点に認められてきた。戦争は、国民文化（Nationalkultur）の合理主義的解体に対抗する大いなる手段なのだ。そして、この戦争への私の参与は、世界支配や貿易支配とは何ら関係がない。ドイツ文化が外部からの恐ろしい精神的圧力と襲撃を受けて強いられた、自己認識と自己限定と自己強化の、あの情熱的な過程に参与しているということなのだ……（GW XII 116）

ここに明示されているように、マンにとって「ドイツ」の主体は市民である。彼が他の知識人たちと同様に、それを守ることがドイツの戦争の意義であるとし、また、現実に起きている階級や政党への民族の分裂はそれによって解消されるとしているところの「文化」も、「ナショナルな特性」も、市民を担い手としている。実のところ、マンは別の箇所で、「ドイツ的なものと市民的なものとは一つである」（GW XII 107）と明言してさえいるのである。したがって、彼が西欧諸国のデモクラシーに対してドイツの独自性を主張し、「国民文化」に基づく国家の在り方について次のように語るときにも、例えそこに「市民」という言葉が明記されていなくとも、すべては市民的な価値基準に則って意味づけされている。

> 個人主義的な大衆（Masse）は民主主義的であり、民族（Volk）は貴族的である。大衆は国際的であり、民族は極めて独特な刻印を帯びた神話的な人格である。[……] 普遍的なものの担い手は形而上的な民族である。したがって、政治を大衆の精神と意味において行うのは

精神的に誤っている。政治的生活と国民的生活とを統一されたものとして体験する可能性がそもそも存在するようにするには、政治は、例えそれによって大衆そのものの理解から離れてしまうとしても、民族の意味と精神において行われるべきであろう。(GW XII 248f.)

自由、義務、そしてもう一度自由、これがドイツである。歴史においては個人主義的な思考の時代と社会的な思考の時代とが交互に訪れる、とよく言われる。しかしドイツの精神状態にとっては、二つの敵対する原理の間には対立など存在しないし、この二つの間を行ったり来たり動揺する必然性も存在しない。国家社会主義（Staatssozialismus）と呼ばれていて、人権主義的・マルクス主義的な社会主義とはいくぶん異なる倫理的社会主義と実に折り合いがいいというのが、ドイツ的個人主義の特色である。というのも、社会的原理にはただ啓蒙主義の個人主義、西側の自由主義的個人主義だけが敵対するのである。[……]「組織化」（Organisation）――含蓄に富んだ言葉だ！「有機体」（Organismus）――まさしく生の言葉だ！ というのも、一つの有機体は部分の総和以上のものであり、この以上のもの（dieses Mehr）こそまさに精神であり、生であるからだ。(GW XII 279f.)

2

第一次大戦末期、長引く戦争への倦怠感や幻滅から、ドイツ各地で兵士による反乱や労働者によるストライキなど抗議行動が頻発するなか、ロシア革命の余波が東方からいつドイツに波及してもおかしくない状況であったとはいえ、ドイツの革命は意外なことに、首都ベルリンに先んじて、最も保守的と思われていたバイエルンのミュンヒェンで、1918年11月７日についに火蓋を切った。資本主義世界とその打倒を目指す革命世界という「1917年10月」（ロシア旧暦。新暦では11月）以来のイメージが定型化するなかで、軍事上の敗北と相並んで起こったこの革命によって、ドイツは不可避的に両世界の抗争の場と化し、そのために、新国家形態としての「社会主義共和国」については当初から、西側民主主義の議会制を取るのか東側共産主義のレーテ体制を取るのかは、政治家にとっても知識人にとって

も議論の分かれるところであった。

1918年から19年にかけてのドイツの革命に対するマンの見解も、11月革命以来、ベルリンから各地へと飛び火した1月蜂起を経て、さらにはマンにとって目と鼻の先で展開することとなるバイエルン「第二の革命」へと一連の事件が続くなかで、否定と肯定とを交錯させたものとなっている。しかし、その錯綜した見解のなかには明らかに、「極めて非ドイツ的な、文化に敵対するプロレタリア独裁」(1918／11／13, TB 76) への不安と、「古い、西に代表される民主主義」に代わる「新しい理念」(1918／11／29, TB 98) への期待との、それぞれにおける一貫性がある。マンの社会主義・共産主義観については、そもそもマンにとって「ドイツの革命」の論点がどこにあり、そのなかでマンが「新しきもの」をどう位置づけていたかを検討することで理解されよう。

革命勃発直後の11月12日の日記に、マンは「ドイツ社会主義共和国」について、「新しいものでありつつしかもドイツの路線上」にあり、「西のブルジョア共和国や金権主義を乗り越える」ものへの期待を記しており (TB 73f.)、11月26日の日記には、ある新聞について、「社会主義化と共産主義とをナショナルな連帯 (nationale Solidalität) として捉えている」点で共感を覚えると書き留めている (1918／11／26, TB 94)。[8] その後、1919年1月に、「新しいドイツのために」としてまとめられた複数の知識人に対する公開アンケートへの回答で次のように述べていることから、マンの議論の焦点が明らかになる。

> いま我々のもとで定着せんとしているような社会的な民族国家 (sozialer Volksstaat) は、完全にドイツの発展途上にあったものである。私が確信しているところではまた、ほかならぬドイツにおいては、社会的・社会主義的な国家は市民的な (bürgerlich) 精神の流れを汲まずしては生きていくことも機能することもできないであろう。というのも、帝国主義的なブルジョア階級 (Bourgeoistum) とはおよそ何の関係もないこの精神が、とにかくドイツの礼節の精神なのである。純然たる労働者共和国、プロレタリア (Proletariat) 独裁、そんなものは野蛮であろう。(E II 11)

「民族国家」は、マンが『非政治的人間の考察』のなかでヴァルター・ラーテナウ（Walter Rathenau）から繰り返し引用し、「美辞麗句を振り回すブルジョア・デモクラシー」（GW XII 271）に対置していた言葉であるが、「市民」（Bürger）として「プロレタリア」にのみならず「ブルジョア」に対しても前線を築いているマン[9]が非西欧性・反西欧性と市民性に基づいて構想しているこの「社会的な民族国家」なるものは、1914年の開戦時に「ドイツ的」を「市民的」と解する知識人によって喧伝された、あらゆる階級・党派を超越した「文化」による統一という「民族共同体」（Volksgemeinschaft）の理想と同じ構図を持っている。マンが「新しい理念」をそうしたものとして受容していることからは、戦争から革命へと連なるマンの思考の継続性が容易に読み取れよう。

そして実際、マンは約半年に及ぶ革命情勢のなかで、例えば「1914年以来の戦闘的な全革命」（1919／1／3, TB 125）や「新たな1914年8月1日」（1919／3／24, TB 178）、「戦争が革命の始まりであったことが、まず明らかにされねばならなかった」（1919／4／17, TB 200）という表現にも確認できるように、共産主義革命を、1789年の残骸に過ぎない西欧の古い理念に代わる新たな理念をもたらすための「ドイツの闘い」として鋳直そうとしている。特に1919年3月から4月にかけて、ハンガリーをはじめヨーロッパ各地で革命的蜂起が頻発して西欧諸国が形勢不利に陥るなかでマンが示した反応には、革命に「西欧」対「ドイツ」という対立図式を応用している様子や、共産主義にナショナルな要素を見出そうとする考え方が、実に明瞭に表れている。

> ブダペストで、ヴィーンで、またハンブルクやブレーメンでも（水兵の行動に）、スパルタクス主義とナショナルな感情との混合は見紛うかたない。[……] 修辞家ブルジョアジーに対する蜂起！ この無頼の連中のいかさま文句によって骨の髄までボロボロにされるに任せた後に、ナショナルな高揚が、私にとって共産主義の形をとった、新たな1914年8月1日！ 私は通りに駆け出してこう叫びかねない、「西側の虚言デモクラシーを倒せ！ ドイツとロシア万歳！ 共産主義万歳！」（1919／3／24, TB 177f.）

しかしながら、マンにとって「ドイツ」と「共産主義」との決定的な媒介項となったのは、やはり何よりも、「ドイツを西側の啓蒙諸国から区画する歴史的な特殊発展の原初」[10] としての「中世」であろう。

日記によると、マンは1919年4月16日から27日にかけて、戦争によって中断されていた小説『魔の山』*Der Zauberberg*（1924）の執筆再開に向けて、その参考文献としてハインリヒ・フォン・アイケン（Heinrich von Eicken）の『中世の世界観の歴史と体系』*Geschichte und System der mittelalterlichen Weltanschauung*（1887）を読んでおり、[11] すでに指摘されているように、この中世の研究が明らかに、当時のマンの共産主義解釈と密接に関係している。というのも、アイケン読書はレーテ共和国――厳密には、独立社会民主党に代わってよりラディカルな共産党が主導する第2レーテ共和国――の混乱のさなかに行われており、マンは当時の日記に、中世の勉強にまつわる記述と、流血の惨事にまで発展する現実のレーテ共和国と中央政府との抗争にまつわる記述とを混在させながら、未来の共産主義について、中世の世界観を通して考察しているのである。

> 禁欲的・超越的な根本理想は、経済的な面ではまったく社会主義的・共産主義的性格を帯びている。いかに特色ある、皮肉な忍耐強さをもって、神の国の純粋理念が人間的に不十分な現実に適応させられているかは、奇妙である。そこにもまた実にアクチュアルなものがある。（1919／4／20, TB 206）

また、「禁欲的な神の国を常々、将来の共産（主義）的な世界文化に似ていると感じる」（1919／4／24, TB 211）という書き込みもある。

マンが、古い世界が一掃された後に新しい本当の世界が訪れるという、千年至福説的な世界観を後ろ盾とするこうした共産主義観を展開した背景としては、アイケン読書のほかに、11月の革命勃発前にすでに、セルゲイ・ブルガコフ（Sergej Bulgakow）の『政治的英雄主義の心理学』*Zur Psychologie des politischen Heroismus*（1918）によって、ロシア革命を「反ブルジョア性」と「宗教性」、世界の救済や「神の国」を求める終末論的世界観の側面から捉えようとするブルガコフの革命観を知っていたという事実も無視できない。[12] また、レーテ共和国の要人である無政府主義者

グスタフ・ランダウアー（Gustav Landauer）は、マルクス主義を啓蒙主義的・資本主義的伝統にとらわれていると非難して、中世的な共同体を非資本主義的な経済形態の模範としており、彼の著した社会主義論についても、マンは当時、共感を覚えつつ読んだことを日記に書き留めている。[13]

ハンス・ヴィスキルヒェン（Hans Wißkirchen）によると、この革命当時、複数の知識人の共産主義像に認められた共通点として、「啓蒙主義的な伝統によって仲介された共産主義の教義の合理的・理性的なものを拒否し、革命を中世とロマン主義に基づくドイツ的な特殊発展の一つの新しい変種として見る」という特徴があったという。[14] 共産主義を「ドイツ的」というフィルターにかけるマンも同様に、こうした読書から得られる「神の国」「共同体」そして「共産主義」というアナロジーによって、共産主義を、宗教的権威を克服した啓蒙的資本主義の高度の発展を志向する近代のマルクス主義的な定義とはおよそ無関係に、むしろ逆に、中世の教会的な社会秩序との関連のうちに捉えることで、「新しいものでありつつドイツの路線上に」ある「ドイツ的な共産主義」を理念化している。

マンが語るこの「ドイツ的」は、彼が大戦中に、「ドイツ的なものと市民的なものとは一つである」と断言した、あの意味における「ドイツ的」に通じている。それはすなわち、「苦境に立つ自我のもっとも遠い起源を、正統な基盤を、最古の魂の伝統を探し求め」、個人的記憶が真っ先に辿り着く故郷リューベックを通じて「ドイツ・ハンザ同盟の全盛期」へと遡り、この時代に育まれた非政治的な市民文化こそがドイツ的本質の根ざすところであると主張した（GW XII 114）、その意味における「ドイツ的」である。マンにとっては市民的伝統の起源を意味する中世と、その正統な後継者を意味するロマン主義とを歴史的根拠とする、市民・文化・ドイツという概念連鎖が、この「ドイツ的な共産主義」には浮き彫りになってくる。

3

ドイツの左翼革命挫折の決定打となった1919年5月3日のレーテ共和国鎮圧からまだ間もない6月、マンはロマン派の音楽家ハンス・プフィッツナー（Hans Pfitzner）の誕生記念講演で、東側のマルクス主義か西側の自由資本主義かという、ヨーロッパ世界の二極化によって突きつけられる

二者択一を前にした「中間の国」ドイツの課題を、次のように語っている。

> 必要なのは、内面化、深い内省、そして国民の自己探求です。ドイツが、自己への忠実を守って東と西との間に独自の道を見出すことができるように自らを理解すること［……］、それが今日、世界が必要としていることです。そして、ほかの芸術にはほとんど見られないほどに、ナショナルな生の泉がザワザワと音を立てている聖なる深淵にやすらっている芸術、そんな芸術こそが最もアクチュアルで最もモダンで最も生に密着している芸術なのです。国民はそんな芸術にそっと耳を傾け、そして純然たる栄誉がこの芸術を取り巻くことでしょう［……］。(GW X 421)

マンがここで「ナショナルな生」に馴染みの芸術として讃えているのは、当然のことながら、ロマン主義芸術である。つまり、ドイツの自己理解の必要性を説いた上で、「ナショナルな生」に密接な芸術としてロマン主義を引き合いに出すことによって、「東」でも「西」でもない「ドイツ的なもの」を説明しようとしているのである。

では、これに先立ってマンが、「ドイツ的なもの」に根ざしていると考えるこのロマン主義についてどのように語っているのかを見てみよう。彼は「ロマン主義的な本質のすべてにいつの時代にも結びついているであろう評判の悪さ（Verrufenheit)」について、次のように述べている。

> それ［評判の悪さ］に気づくには、ただ「ロマン主義」という語を精神と芸術の言語から、政治の言語へと置き換えるだけで事足ります。――それはすなわち「反動」(Reaktion）です［……］。(GW X 420)

そして、プフィッツナーの作品を例に、ロマン主義と「キリスト教的中世との比類ない親密性」について、また、ロマン主義が「魂においては近代や進歩からは遠く隔たっている」ことについて言及した上で、こう続ける。

> しかし芸術は、みなさん、生自身と同様に非合理的な領域です。［……］芸術家気質には偉大な例があります。ヴァーグナーとドストエフスキー

とを思い起こしてください。彼らのなかでは、我々が常々ロマン主義的で反動的と呼んでいる要素（例えばナショナルな要素）が、我々が革命的と呼んでいる要素と極めて有機的に結びついていました。[……]ロマン主義と革命主義は論理的な対立物ですが、有機的な対立物ではありません。生にはそんな対立は存在しないのです。(GW X 420f.)

「ロマン主義的要素」と「革命的要素」との結び付きについて芸術的に語りながら、それに先立って、「ロマン主義」という美学的用語が「反動」という政治的用語に置き換えられることをことさらに言い添えておくことによって、「反動的要素」と「革命的要素」との結び付きという政治的ニュアンスも響かせる——、これは、大戦中にマンが、非政治性を売り文句にする考察者が政治について語るという、アイロニカルでパラドクシカルな論文『非政治的人間の考察』にくまなく行き渡らせていた、芸術の問題と政治の問題とを、境界を曖昧にして入れ替わり立ち替わりさせながら論じるという手法そのままである。さらに、プフィッツナー講演から約2年後の1921年2月にも、マンはある雑誌のロシア文学特集号に寄せた序文のなかで、「第三の国の綜合的な理念」について、「芸術的に表現すればそれは感覚性と批評性との綜合であり、政治的に表現すれば保守主義と革命との綜合である」というように、芸術的表現を政治的表現へと置き換える挿入を行っている (GW X 598)。

この文学特集への寄稿文にせよ、先のプフィッツナー講演にせよ、主題はあくまで文学・芸術であって決して政治ではなく、したがって当然のことながら、政治的事柄への言及は余談に過ぎない。しかしながら、というよりはむしろ、それだからこそ、この「芸術論」や「文学論」のなかでマンがこうして政治的表現について云々していることが、ことさらに際立ってくる。芸術・文学の話に政治的要素が混入しているという事実、作家の問題意識において芸術的・精神的な事柄が政治的・社会的な事柄と完全には隔てられていないという事実、作家が国家の問題や政治に無関心ではいられないという事実、それはつまりは、作家もある特定の「時代」に生きてその「時代」のなかで語っているということの証左にほかならない。

戦争という例外状況のなかでその分離が止揚された「文化」と「政治」は、終戦によって再び分離されたわけではなく、現実の第一次大戦および

ドイツ革命がどうであったかは別として、1914年以来マンは明らかに、「国民文化」を守るための「ドイツの闘い」のなかに身を置き続けている。それは、戦争の意義が、「民族が単なる文明のなかに埋没してしまうのを阻止」し、「ナショナルな特殊性の維持に奉仕」するところにあると述べた意味における戦争であり（GW XII 249)、実際の戦火がやみ、革命が過ぎ去って、物語作品の執筆を再開してからもなおマンの闘いが終わらなかったのは、それがマンにとって何よりも「文化戦争」(Kulturkrieg)[15]だったからである。そして、軍事上の勝敗が政治的・社会的・文化的な価値基準を規定するのを防ごうとすればこそ、マンにとって「中間の国」ドイツの立場はますます不安定なものとなり、「ナショナルなもの」を表象する「文化」を追求するという戦前からの傾向は、そうした危機感と相俟ってなおのこと強められていった。

しかしながら、そうした危機回避の試みを通じてドイツの国民性を問い続けるマンは一方で、左翼革命挫折後に保守的思想が台頭してくる戦後の世界へと移し置かれている。その点で指摘されるべきは、マンのこうした思想上の試みの中枢にある、ナショナルな「文化」によって統一された有機体としてのドイツ像と、アルトゥール・メラー・ファン・デン・ブルック（Arthur Moeller van den Bruck）を精神的父祖と目して青年エリート層を中心に浸透していった「保守的革命」(Konservative Revolution)と、社会主義をドイツ固有の伝統に適合させようとして唱えた「国民的な社会主義」(nationaler Sozialismus）の構想との親縁性であろう。

第一次大戦の戦争体験を母胎とし、旧世代のナショナリズムとは一線を画するこの「新ナショナリズム」について簡単に述べておこう。[16]

「保守的革命」という名称がすでに、「右」と「左」との固定的な分断を消去する、従来は馴染みのなかった一つの混合であることにも顕著なように、「『右』にはナショナルなものの代表が組み入れられ、その一方で、社会改革的なものや社会革命的なものはもっぱら『左』に委ねられる」[17]という従来の思考図式は、保守的な原動力と革命的な原動力とを結びつけようとするこの思想陣営においてはもはや通用しない。これに関連して、マンが晩年の長編『ファウストゥス博士』*Doktor Faustus*（1947）のなかで、1920年代初頭のドイツのある保守的な知識人サークルを描写する箇所で展開している保守的革命の分析には、甚だ興味深いものがある。この

一節は、紛れもなく作者自身の体験に基づくものであり、マンは小説執筆から遡って25年前の「保守的革命」との交流で自らが得た印象を掘り起こすようにして、この思想陣営に体現されていた、「ナショナルなものの担い手も社会革命的なスローガンを引き受けている」[18] という時代の精神風土について、語り手とともに次のように回想するのである。

> それは古くて新しい、革命的に反動的な世界（eine alt-neue, eine revolutionär rückschlägige Welt）であった。そこでは個体の理念に結び付けられた諸価値、すなわち真理・自由・正義・理性がすっかり力を奪われて退けられ、あるいは、ここ数世紀とはまったく異なる意味を獲得していた。つまり、青白い理論から引き離され、血によって相対化され、暴力・権威・信仰の独裁というはるかに上位の法廷に関連づけられていた。——しかし反動的な、昨日あるいは一昨日のやり方によってというのではなく、人類を神政的・中世的な状態と条件とへ新奇なやり方で押し戻すようにしてである。それが反動的でないのは、球のまわりの道を、もちろんぐるりと一周して——つまりもとに戻って来る道を、逆行的とは言えないのと同様である。その通りであった。逆行と進歩、古いものと新しいもの、過去と未来が一つになり、政治上の右翼がますます左翼と一致するようになったのだ。(GW VI 489)

「本質維持的であると同時に革命的であり、創造的であると同時に破壊的」[19] なこの運動は、過去に忘れ去られた根本原則、失われた永遠の価値を取り戻して「保守」するために、その障害となっている一切を破壊する「革命」を行うというものであり、運動の当事者が主張するところによれば、再生されるべきはドイツ、一掃されるべきはフランス革命の残滓ということになる。それはちょうど、世紀転換期以来の文明批判に似ており、事実「保守的革命」では思考の中心に「生」の概念が据えられている。そして、「生」に付随する「体験」「直観」という主観的形式が、合理的分析の入る余地のない根源的なものとして称揚され、逆に理性・悟性は合理化・原子化によって魂を奪い、「生」の統一性を損なうものとして蔑まれている。ただし、戦争体験を経ているこの運動においては、通俗化された「生

の哲学」はその非合理的な諸理念とともに意味を尖鋭化され、ナショナリズムの強化に利用されている。

「保守的革命」の人々は、西欧型の自由資本主義、その稚拙な模倣としてのヴァイマル共和国、東方のマルクス主義的社会主義など、現存する社会形態はもちろんのこと、戦前のいわゆる「ヴィルヘルム体制」も、1789年以来の合理主義・俗物主義に侵食された浄化されるべき世界、魂なきブルジョア的唯物主義とその産物として激しく攻撃する。その際、自分たちの運動を「フランス革命」に対置されるべき「ドイツの革命」として、1914年を起点とする一つのプロセスとして捉えており、ドイツの理想像の鍵を第一次大戦の生々しい戦争体験に求めている。それはすなわち、ヨハン・プレンゲ（Johann Plenge）やエルンスト・トレルチ（Ernst Troeltsch）ら知識人によって「1914年の理念」として喧伝され、市民層のみならず労働者も含め多くのドイツ人を政治的・社会的矛盾を顧みることなく戦争に臨ませた、開戦時の国民的一体感の高揚の体験であり、また、特に前線兵士にとっては、戦争を「父」と呼び、「塹壕」（Kampfgräben）という「胎」（Schoß）から未来を担う新しい人間が生まれ出たのだと表現したエルンスト・ユンガー（Ernst Jünger）が、その戦争文学で美化しているような「塹壕体験」である。つまりは、「我」（ich）が「我々」（wir）へと溶解してあらゆる階級的相違が文化的伝統の共有によって有機的に克服されたかに思われた、非常事態における「民族共同体」の原型の体験である。

「国民的な社会主義」はこの戦争体験を再現させるものとして構想されており、生産手段を掌握する権力や、社会的生産物の公平な分配といった経済的な問題としてではなく、何よりも国民的統一、階級的秩序をもつ国家機構への全国民の編成を意図するものとして理解されている。[20] ここでいう「国民」とは、「断固たる政治的意志をもって一つの政治的統一体へと形成された民族」[21] のことであり、したがって、複数の政党の存在を前提とする議会政治はこれを妨げるものとして断固拒絶され、政治家ではなく指導者による「新しい政治」が求められている。そして、「自由」概念はそうした権威的な国家秩序のなかに自己を組み入れることとして鋳直され、この思想においては、「国民的」であることと「反民主主義的」であることとは常に一体となっている。

ヴァイマル共和国期の非合理主義・反民主主義思想の土壌として、後には好むと好まざるとに関わらずナチズムの権力掌握に貢献することになったこの「保守的革命」については、アルミン・モーラー（Armin Mohler）がその多様な思想動向を分類・整理して、この運動にゆかりの人物・サークル・発行雑誌について、またその他この思潮と直接的あるいは間接的に関わった個人や集団について、広範なデータをまとめている。[22] モーラーはマンの第一次大戦中の言説、とりわけ『非政治的人間の考察』に着目して、マンの側からの「保守的革命」への精神的影響力を指摘しているが、それはともかく、自らが中世とロマン主義に還元している市民的伝統への強い憧憬と西欧諸国の「デモクラシー」に対する根深い不信感とから、政治的立場をまだ明瞭にしていなかった1919年から21年にかけて、マンが「保守的革命」の人物とコンタクトを取っていたのは事実である。詳細については、ヘルベルト・レーネルト（Herbert Lehnert）がメラー、ハインリヒ・フォン・グライヒェン（Heinrich von Gleichen）、マクス・ヒルデベルト・ベーム（Max Hildebert Boehm）らを中心とするベルリンの「リング・クライス」（Ring-Kreis）との関係について、マンがどの点でこの思想に接近し、どの点で袂を分かったのか、両者の類似と相違を指摘しながら検討しているので、それを参照されたい。[23]

しかしながら、本稿では実際の運動としての「保守的革命」とマンとの具体的な関わりに立ち入ることはせず、マンがこの思潮と時代を共有していたという事実を指摘するに留めたい。というのも、「保守的革命」との交流を指摘するまでもなく、「1914年の理念」として言説化された開戦時の一体感の印象が、「保守的革命」をはじめとする戦後のナショナリズム運動の基盤固めの一翼を担っているという事実、「民族」「共同体」「国民」「有機体」そして「国民的な社会主義」という、マンにとっても馴染みの諸理念が、反民主主義思想の根本理念となり、徹底した政治的非合理主義へと収斂されていったという事実に鑑みるならば、マン自身が「ナショナルなもの」について政治的に語っているのかそれとも文化的に語っているのかとは別に、そもそも作家の思想が時代のなかで持つ意味は、やはり問われねばならないからである。

確かなことは、この時代には、「文化」の担い手たる知識人の言説は「ナショナルなもの」の創出に決定的な役割を果たしていたということで

ある。表象は生産者の意図とは無関係に解釈者によって加工され、同じ文言でもその意味は解釈の仕方によって、その解釈は「時代」によって異なる。芸術的・文学的な表現が美的なものとしての自律性を確保し得ずに政治的意味を付加される時代にあっては、非政治的・反政治的な芸術家・作家といえども、政治とは無関係ではあり得ない。そして、「時代」のなかで語る――形式が出版であれ講演であれ、自分の思想を公にする――以上、作家はその言説化されたものが現実の政治的・社会的状況のなかにつくりだし得る精神風土に、責任を負わねばならない。

4

1920年9月5日付のユーリウス・バープ（Julius Bab）宛書簡で、マンは改めて、「民族共同体」の衣としての自らの社会主義・共産主義理念を浮き彫りにしている。

> ある種のドイツ的共産主義は中世に実現されていました。私は事態が我々の場合にも大体この方向に展開していくものと信じています。私の目前に浮かんでいるようなドイツの理想的未来像については、あなたがお読みになったカイザーリングについての文章の末尾で素描してみました。私が「ラディカル」でないのは何よりも、社会主義のインターナショナリズム性を信じてはいないという意味においてです。むしろ私は、各々の民族が独自の社会主義を持つようになると信じています。人間的なものはただナショナルなもののなかにのみ実現されるということに変わりはないのです。(B 183)

この時期にはほかにも、「ドイツ的な保守主義と社会主義との統一」に未来はあるという記述や（1920／1／19, TB 369)、「マルクス主義的な階級社会主義（Klassensozialismus）を民族共同体へと精神化すること」が必要であるという主張など（E II 26)、類似の見解が確認できる。

バープ宛書簡でマンが、ナショナルなものを土台とする各国独自の社会主義なるものに関連づけて想起させているのは、その半年前に公開されたヘルマン・カイザーリング伯（Hermann Graf Keyserling）宛書簡で、

「文化」を「人間的な総体と調和」、「魂と精神との綜合」と名付けた上で描いた、以下のドイツ像のことである。

> 文化としての、傑作としての、音楽の実現としてのドイツ。複数の声が芸術性豊かな自由のなかで混じり合い、そして高尚な全体に奉仕する、一つの賢明で豊かなフーガのごときドイツ。多面的な民族の有機体（Volksorganismus）。区切られつつも統一され、畏敬の念と共同性、真正さと現在性、誠実さと勇敢さに満ち溢れ、保存しつつ創造しつつ、威厳に満ち、幸福で、諸民族の模範。── これは夢見られるに値し、信じられるに値する夢なのです。（GW XII 603）

さらにマンは、1921年9月に故郷リューベックで行った講演『ゲーテとトルストイ』*Goethe und Tolstoi*の末尾でも、この「夢見られるに値し、信じられるに値する夢」として語っているドイツ像を、同じ文言で繰り返し語り、この「我々の待望するドイツ」を、「最も古く、最も威厳ある意味において、中世的・ドイツ的な意味において市民的」と呼んでいる（E II 83f.）。

この「文化」として、「芸術」としてマンが理解している「保存しつつ創造」する「多面的な民族の有機体」、そしてそれを想起させながら語っている「各々の民族が独自の社会主義を持つ」という理想は明らかに、第一次大戦時に多くの知識人とともにマンもその生成を思い描いていた、あらゆる階級・党派の相違が「国民文化」によって止揚されて、政治的生活と国民的生活、国家の秩序と個人の自由が統一された、「民族共同体」としての「ドイツ」というユートピアを踏襲している。すなわち、市民の価値観・世界観に基づく文化概念によって民族を束ねようとする、反民主主義的で権威的な、一種の「上からの社会主義」の構想である。

しかしながら、こうして戦前と同じ理想を語る作家は明らかに、第一次大戦によって政治的・社会的・文化的に変貌したドイツの戦後状況に置かれており、この「時代」に対する態度決定を求められていた。1921年11月20日、マンは日記に、「『デモクラシー』を相手に闘うことが自分にとってふさわしいことかどうかという最後の良心の問題」が残っていると記している（TB 555）。時代の要求を前にして避けては通れないこの問題を、マ

ンがその後、反民主主義の立場を貫いた自らの戦争体験とともにどう位置づけていくのか、それについては別の機会に検討したい。

テクスト

トーマス・マンからの引用は下記を用い、本文中には以下の省略記号、巻数（ローマ数字）、ページ数（アラビア数字）を付した。

Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1974. (GW)

Thomas Mann: *Essays*. Hrsg. v. Hermann Kurzke u. Stephan Stachorski, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1993. (E)

Thomas Mann: *Tagebücher 1918-1921*. Hrsg. v. Peter de Mendelssohn, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1982. (TB)

Thomas Mann: *Briefe 1889-1936*. Hrsg. v. Erika Mann, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1961. (B)

注

1 Vgl. Hans Wysling: *„Geist und Kunst". Thomas Manns Notizen zu einem „Literatur-Essay"*. In: *Thomas-Mann-Studien I.* Francke Verlag, Bern u. München 1967, S.123-233.

2 Ebd., S.215f.

3 Vgl. Ebd., S.223.

4 Ebd., S.204f.

5 Vgl. Wolfgang J. Mommsen: *Die deutschen kulturellen Eliten im Ersten Weltkrieg*. In: ders.(Hrsg.): *Kultur und Krieg. Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg*. Oldenbourg, München 1996, S.1-15.
野田宣雄 『ドイツ教養市民層の歴史』 講談社 1997年 37-52ページ参照。

6 ドイツ語のVolkとNationについて、本稿では前者を「民族」、後者を「国民」と訳すことで統一した。なお、形容詞のnationalについては、原則として「ナショナルな」と訳したが、文脈を考慮して「国民的」あるいは「国民の」と訳したものもある。後述する「保守的革命」の根本理念の一つであるnationaler

Sozialismusに関しては、参考文献の翻訳に倣って「国民的な社会主義」という訳語をあてた。

7 Thomas Anz／Michael Stark (Hrsg.): *Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1910-1920.* Metzler, Stuttgart 1982, S.315.

8 この新聞『オイロペーイッシェ・ツァイトゥング』*Europäische Zeitung*は、後に「保守的革命」の中心人物となるハインリヒ・フォン・グライヒェンが編集したものである。Vgl. Thomas Mann: *Tagebücher 1918-1921.* S.610.

9 マンは『非政治的人間の考察』のなかで、bourgeoisをBürgerと訳すのは「文士の不法行為」であるとして、これに異議を唱えている。マンにとってbourgeoisは、西欧の啓蒙主義的・資本主義的な物質文明の担い手で、常に「政治」と結び付いており、それに対してBürgerは、中世末期の市民時代のドイツ人やロマン主義のドイツ人を模範とする、「ナショナルではあるが非政治的」な存在を意味する。したがって、この二つの概念の対比は、「文明」と「文化」、「西欧」と「ドイツ」の対比に照応する。

10 Hans Wißkirchen: *Zeitgeschichte im Roman. Zu Thomas Manns Zauberberg und Doktor Faustus.* In: *Thomas-Mann-Studien VI.* Francke Verlag, Bern 1986, S.53.

11 Vgl. Thomas Mann: *Tagebücher 1918-1921.* S.199ff.

12 Vgl. Ebd., S.28ff.

13 Vgl. Ebd., S.157f.

14 Vgl. Wißkirchen: a.a.O., S.46-56. ヴィスキルヒェンは特にエルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch) とエルンスト・ブロッホ (Ernst Bloch) の共産主義観に言及している。それによると、大戦中にドイツの非政治性を「中世的・階級的・農耕的本質の名残」と説明したトレルチは、革命の一つの方向として、レーテ体制を介する、高度な生産縮小と教会的管理を伴う中世的・階級制的な社会秩序への道を説いている。ブロッホは共産主義の啓蒙主義的・合理主義的側面を重視せず、それをドイツの伝統がもつ非合理的・ユートピア的要素と統一させようと試みており、マルクス主義は現存のものに依存するあまりにユートピア的構想には見合わないとの考えから、ユートピアを中世の千年至福説の観念によって喚起している。

15 Vgl. Barbara Beßlich: *Wege in den ‚Kulturkrieg'. Zivilisationskritik in Deutschland 1890-1914.* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt

2000.

16 「保守的革命」については主に以下を参照した。
Armin Mohler: *Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932.* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1949; 4. Aufl. 1994.
Kurt Sontheimer: *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik. Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933.* Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1978; 3. Aufl. 1992.
ジェフリー・ハーフ 『保守革命とモダニズム ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』 中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳 岩波書店 1991年

17 Mohler: a.a.O., S.145.

18 Ebd., S.145.

19 Sontheimer: a.a.O., S.119.

20 Vgl. Ebd., S.276.

21 Ebd., S.253

22 Vgl. Mohler: a.a.O.モーラーは「民族派」(Völkische)、「青年保守派」(Jungkonservative)、「国民革命派」(Nationalrevolutionäre)、「盟約派」(Bündische)、「農民運動派」(Landvolkbewegung) の5つに分類して各派を特徴づけている。保守的革命論に含まれる思想動向は実に多様で、活動形態もクラブ (Klub)、サークル (Kreis)、同盟 (Bund)、運動 (Bewegung) など様々である。「六月クラブ」(Juniklub) をはじめ550以上の政治クラブがあり、530以上の雑誌が発行されていた。

23 Vgl. Herbert Lehnert: *Nihilismus der Menschenfreundlichkeit. Thomas Manns „Wandlung" und sein Essay „Goethe und Tolstoi."* In: *Thomas-Mann-Studien IX.* Klostermann, Frankfurt a. M. 1991, S.61-73.

Thomas Mann und der Erste Weltkrieg:

Betrachtungen zur Kultur und Politik bei einem Schriftsteller.

Miki MURATA

Beim Ausbruch des Ersten Weltkriegs konnte sich die große Mehrheit der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller ohne Schwierigkeit mit dem politischen System des deutschen Kaiserreichs identifizieren, obwohl sie seit dem Ende des 19. Jahrhunderts gepflegt hatte, diesem die „Kultur" entgegezustellen. Dabei ging es ihnen nicht einfach um die Politik und den Militarismus des Staates, sondern vielmehr um die Erhaltung der deutschen geistigen Tradition. Als sie so mit der schematischen Vorstellung der westeuropäischen „Zivilisation" und der deutschen „Kultur" dem Staat, seiner Machtpolitik und seinem Krieg ihre Huldigung erwiesen, wurde die Diskrepanz zwischen deutscher Kultur und Politik, die man für lange Zeit für selbstverständlich gehalten hatte, aufgehoben.

Genau in diesem Zusammenhang sprach auch Thomas Mann, der während des Ersten Weltkriegs in mehreren Aufsätzen die Probleme jener Zeit behandelte und von einem antidemokratischen Standpunkt aus den deutschen Krieg verteidigte. Sogar nachdem der Krieg zu Ende war, die Revolution ausgebrochen und dann niedergeschlagen worden war, und er selbst seine künstlerische Arbeit wieder aufgenommen hatte, blieben seine Gedanken immer noch beim deutschen Kampf für die „Erhaltung der nationalen Eigentümlichkeiten" seit 1914. Dies deshalb, weil der Weltkrieg für ihn vor allem einen „Kulturkrieg" darstellte, und sein Krisenbewusstsein, dass der militärische Sieger auch die deutsche „Idee" überwältigen würde, verstärkte immer mehr sein Streben nach dem „Nationalen". Aber sein ideales Zukunftsbild von Deutschland fand sich genau in der Vorstellung der „Volksgemeinschaft" zur Zeit des Kriegsausbruchs, in der das ganze Volk ohne Unterschied von Stand und Parteizugehörigkeit mit der „Nationalkultur" vereint sein sollte, während sich die politische und kulturelle Situation Deutschlands nach dem Krieg doch völlig verändert hatte.